

機関番号：37503

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008 年～2010 年

課題番号：20520403

研究課題名（和文）契丹語辞典の編纂

研究課題名（英文）THE EDIT OF THE DICTIONARY OF THE KHITAI LANGUAGE

研究代表者

吉本 智慧子（YOSHIMOTO CHIEKO）

立命館アジア太平洋大学・アジア太平洋学部・教授

研究者番号：70331105

研究成果の概要（和文）：契丹語辞典の編纂は契丹言語文字研究史上初めての試みである。本研究 3 年間の着実かつ豊富な契丹文字研究の成果を基礎に、新出墓誌及び離散資料に現れるすべての字形を鑑別して電子化し、これまで未解読の単語の意味を推定すると同時に大量の表音字と表意字の音価を復元し、収集した契丹文字資料を最新の言語学的方法のもとに研究・分析を行ったうえで解読した単語のデータベースを大幅に充実させた。こうしたデータベースの構築によって、契丹文字に関する本格的な言語学的見地からの研究は完成の域に到達し、今後の関連分野における研究に重厚な基礎を提供するものとなった。

研究成果の概要（英文）：The edit of the dictionary of the Khitai language is the firstly attempted in the history of study on the Khitai language and scripts. Based on concrete and rich fruit of three years' research project, the head investigator identifies all the scripts seen on newly excavated epitaphs and dispersed materials and makes electronic texts of them, assumes meanings of words that never have been deciphered, on the other hand, reconstructs phonetic values of lots of phonographies and ideographies, enriches database of words of collected Khitai materials that have been deciphered based on studies and analyses under the newest linguistic approaches. Based on the construction of this database, the full-scale linguistic study of Khitai scripts has reached a level of completion, and offers rich basement of studies on concerning fields.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2009 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2010 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：契丹語・契丹大小字・契丹文墓誌・契丹文離散資料・表意文字・表音文字

1. 研究開始当初の背景

本研究課題申請の学術的背景には、1990年

代以降の、中国東北・内蒙古・河北地区における遼・金時代の契丹文墓誌と関連契丹文字

資料の持続的な発見がある。これらは契丹文字および契丹語の研究に対する極めて豊富な資源である。

研究代表者の専攻は契丹文字・女真文字を中心とする歴史言語学及び遼史であり、毎年中国の関係地区を調査し、契丹文墓誌を収集した。収集した墓誌のあらゆる契丹大小字を電子化し、解読作業を加速し、それによって短時間のうちに大量の契丹語の単語を解読し、さらにこれを基礎に契丹語の文法について全面的な研究を進めえた(『契丹語言文字研究』東亜歴史文化研究会、2004年。『契丹大字研究』東亜歴史文化研究会、2005年)。文法の解明は、さらに単語解読の進展を促進し、こうして墓誌の記述内容を歴史学の角度から考察、研究することができるようになった。契丹文墓誌と遼史などの漢文史料の記述の比較研究を通じて、大量の新知見を獲得し、契丹(遼)の歴史に対する認識を不断に深化しえた。個別的な角度(契丹の社会組織、氏族と部落、皇族と后族、習俗と文化)から契丹(遼)史を研究した諸論文を基礎に、2006年夏までに獲得した墓誌資料によって、『契丹文墓誌より見た遼史』(松香堂、2006年)の一書をまとめた。契丹史の研究は逆に契丹文字の研究を促進させ、歴史的記述の文章に特有の数多くの単語は容易に解読されるようになった。

今日国外にも契丹文字研究者がいるが、文字・言語・史学の総合的研究成果は認められず、主に契丹小字だけを対象にし、より豊富な資料を備えている契丹大字を無視している。契丹小字に関する解読成果に限っても、いままでのところ研究代表者が2004-05年に出版した著書以上の知見は獲得されていない。

2. 研究の目的

『契丹語辞典』の編纂は契丹語言文字研究史上初めての試みである。本研究の申請は、7年来の着実かつ豊富な契丹文字研究の成果を基礎とするものである。研究代表者が研究計画調書を作成する間にも、内蒙古自治区東部と遼寧省で大量の契丹文字が記された文物が

出土したとの朗報を得た。毎年新出土資料が出現するといった豊富な学術環境のもと、現有の研究成果を総括し、さらに単語のデータベースを充実させる上で契丹語辞典の編纂に踏み出せば、今後の契丹学において必ずや予想以上の成果を獲得することができよう。

3. 研究の方法

(1) 収集した契丹文資料の字形を基礎に鑑別して全て電子化する。現時点までに研究代表者はすでに287個の契丹小字の音価、543個の契丹大字の音価を復元し、あわせて一群の契丹語の単語の意味を推定している。収集された契丹文資料が増加するにつれこの作業成果は不断に拡大している。

さらに契丹語の単語の意味を推定すると同時に、継続的に契丹大小字の音価を復元する。解読範囲を拡大するための基礎研究作業の一つとして、解読済みの単語を国際音声記号(IPA)に転写する。

(2) (1)を基礎として、すべての単語に対して語幹と文法的接尾辞の境界を入力する。この作業には単語の文法的分析が不可欠である。契丹文資料の記述内容を全面的に解読し、収集しえた契丹文資料を全部翻訳し、正史その他の漢文史料及び漢文墓誌の記述との比較研究を進める。資料内容の理解を深化することによって、単語の意義・形態素の全面的な抽出・確認を促進させる。契丹語の文法形態素の意味と機能を分析し、文法体系を記述する。

(3) (1)、(2)を基礎として、すべての単語の文脈付き索引(KWIC)を作成する。これに基づいて検索・頻度統計・用例抽出等の処理を行い、それぞれの文法的形態素の種類と意味・用法を体系的に分類・記述する作業を進める。これらの成果に基づいて、最終年度は契丹大小字データベースをさらに充実し、『契丹語辞典』を編輯する。

この辞典の完成は、次の段階の研究に対する堅実な基礎を構築するものである。

4. 研究成果

[平成20年度] 本年度は、まず収集した契丹文資料の字形を基礎に鑑別して全て電子化した。さらに契丹語の単語の意味を推定すると同時に、継続的に契丹大小字の音価を復元した。解読範囲を拡大するための基礎研究作業の一つとして、解読済みの単語を国際音声記号(IPA)に転写した。この作業の完成によって、次年度に行う契丹文資料の全面的解読、収集しえた契丹文資料の全体的翻訳、及び正史その他の漢文史料及び漢文墓誌の記述との比較研究に堅実なベースを作った。

本年度においては研究の基本的な準備段階として以下のような作業を進めた。

- (1) 墓誌以外の大量の契丹文字離散資料を精査・分析し、コンピュータに入力した。
- (2) 以上の資料に出現する新字を電子化し、既存のデータベースを拡充した。
- (3) 入力済みの契丹文字資料に見える単語を引き続き解読した。
- (4) 契丹文字データベースをさらに充実し、契丹語辞典の編纂の準備を行うため、資料調査・収集を実施した。

[平成21年度] 本年度は、収集した契丹文資料の異体字を分析した上で全て電子化した。音価復元済みの単語のすべてを国際音声記号(IPA)に転写した。こうした作業によって、形態面での分析や意味面での解読に大きく裨益することが期待される。契丹文字資料の全体的なアルファベット化は従来行われておらず、音韻復元の研究成果を踏まえて実現したものであり、契丹文資料の全面的解読、収集しえた契丹文資料の全体的翻訳、及び正史その他の漢文史料及び漢文墓誌の記述との比較研究に堅実なベースを作った。

本年度においては研究の進行段階として以下のような作業を進めた。

- (1) 新出資料に現れる文字を精査・分析し、コンピュータに入力した。
- (2) 以上の資料に出現する新字と異体字をと

もに電子化し、既存のデータベースを拡充した。

- (3) 入力済みの契丹文字資料に見える単語の音価や意義の確定などを引き続き行った。
- (4) 契丹文字データベースをさらに充実するため、契丹文字資料の所蔵地における調査・収集を実施した。

[平成22年度] 本年度においては研究の最終段階として以下のような作業を進めた。

- (1) 前年度の調査で獲得した資料を引き続き分析し、コンピュータに入力した。
- (2) 新出契丹大字と契丹小字を電子化し、既存のデータベースを拡充した。
- (3) 入力済みの契丹文字資料に見える単語を引き続き解読している。
- (4) 解読作業とともにいままで推定していない一部の表意字と表音字の音価を新たに復元できるようになった。
- (5) 解読した大量な単語によって、墓誌文の国際音声記号での転写並びに墓誌文の全訳を引き続き行っている。
- (6) 本年度の調査対象は引き続き契丹文字資料が大量に現れる中国モンゴル自治区を重点区域とした。さらに、韓国国立中央博物館をはじめ戦前の日本人学者が調査し得られた韓半島での契丹に関わる古文字資料を現地で調べてデータベースに収めた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 17 件)

- ① 愛新覚羅 烏拉熙春 (吉本 智慧子) 「国舅夷離畢帳と耶律瑛家族」(査読有)、『立命館文学』621号、29～58頁、2011年。
- ② 愛新覚羅 烏拉熙春 (吉本 智慧子) 「韓国における遼金文物の調査研究」(査読無)、『高梨学術奨励基金年報(平成21年度)』、財団法人高梨学術奨励基金、120～127頁、2010年。
- ③ 愛新覚羅 烏拉熙春 (吉本 智慧子) 「紹介：向南・張国慶・李宇峰編著『遼代石刻文続編』(遼寧人民出版社、2010年1月)」(査読有)、『史林』第93号、151～152頁、2010年。
- ④ 愛新覚羅 烏拉熙春 (吉本 智慧子)

Commentary of “Primary sources in the K hitan script” in The Archive of Central Eurasian Civilization Archive, the Center for Central Eurasian Studies, Seoul University, 2010. (<http://cces.snu.ac.kr/eng/sub2/sub2.html>)

⑤ 愛新覺羅 烏拉熙春 (吉本 智慧子) 「『遼代石刻文統編』読後」(査読有)、『中国文物報』2010年10月20日第4版、2010年。

⑥ 愛新覺羅 烏拉熙春 (吉本 智慧子) 「敵鞏巖木古奥室魯子嗣考」(査読有)、『北方文物』2010-3、63～71頁、2010年。

⑦ 愛新覺羅 烏拉熙春 (吉本 智慧子) 「中央民族大学民族古文字陳列館所蔵時代最早的契丹大字墓誌」(査読有)、『首都博物館叢刊』24号、105～110頁、2010年。

⑧ 愛新覺羅 烏拉熙春 (吉本 智慧子) 「契丹文『控骨里太尉妻胡睹古娘子墓誌』『大中央契丹フリジ国故廣陵郡王墓誌銘』合考」(査読有)、『立命館文学』617、35～47頁、2010年。

⑨ 愛新覺羅 烏拉熙春 (吉本 智慧子) 「契丹大字『痕得隱太傅墓誌』漢文『上国都監太傅墓誌』合考」(査読有)、『東亜文史論叢』2009-1、10～22頁、2009年。

⑩ 愛新覺羅 烏拉熙春 (吉本 智慧子) 「遙輦氏迪輦鮮質可汗与陶猥思迭刺部」(査読有)、『契丹研究の現況と研究方向』、111～126頁、2009年。

⑪ 愛新覺羅 烏拉熙春 (吉本 智慧子) 「契丹大字『大中央フリジ契丹国興隱太師妻夫人墓誌碑銘』」(査読有)、『東亜文史論叢』2009-1、52～60頁、2009年。

⑫ 愛新覺羅 烏拉熙春 (吉本 智慧子) 「契丹文『惕隱司孟父房白隱太傅位誌碑銘』『故頭武將軍上師居士拔里公墓誌』合考」(査読有)、『立命館文学』614号、27～42頁、2009年。

⑬ 愛新覺羅 烏拉熙春 (吉本 智慧子) 「契丹大字“天神千万”考」(査読有)、『立命館文学』613号、43～55頁、2009年。

⑭ 愛新覺羅 烏拉熙春 (吉本 智慧子) 「金代契丹人習撚鎮国墓出土的金版画考」(査読無)、科研研究成果報告書：内蒙古東部における青銅器文化関係資料の調査に基づく先秦時代北方民族の研究(研究代表：吉本道雅)、95～99頁、2008年。

⑮ 愛新覺羅 烏拉熙春 (吉本 智慧子) 「歐思涅烈家族與東丹国世選制」(査読無)、科研研究成果報告書：内蒙古東部における青銅器文化関係資料の調査に基づく先秦時代北方民族の研究(研究代表：吉本道雅)。111～118頁、2008年。

⑯ 愛新覺羅 烏拉熙春 (吉本 智慧子) 「契丹語の性・数・格」(査読有)、『東亜文史論叢』、2008-1、1-15頁、2008年。

⑰ 愛新覺羅 烏拉熙春 (吉本 智慧子) 「契丹文

dan gur本義考—あわせて「東丹国」の国号を論ずる—」(査読有)、『立命館文学』609号、1～16頁、2008年。

〔学会発表〕(計3件)

① 愛新覺羅 烏拉熙春 (吉本 智慧子) 「契丹女子の姓名習俗」、韓国檀国大学校・韓国モンゴル学会主催「契丹文化史 歴史」国際学術会議、ソウル歴史博物館。2010年10月。

② 愛新覺羅 烏拉熙春 (吉本 智慧子) 「遙輦氏迪輦鮮質可汗与陶猥思迭刺部：以契丹文『故左龍虎軍上將軍正亮功臣檢校太師只衍昱徹穩墓誌』为中心」、韓国檀国大学校・韓国モンゴル学会主催「契丹研究の現況と研究方向」国際学術会議、ソウル歴史博物館。2009年10月。

③ 愛新覺羅 烏拉熙春 (吉本 智慧子) 「“天朝万順(歳)臆解可以休矣”—遼上京出土契丹大字銀幣新釈—」第三屆中韓宋遼金元史国際学会、中国内モンゴル巴林左旗。2009年8月。

〔図書〕(計2件)

① 愛新覺羅 烏拉熙春 (吉本 智慧子) 『明代の女真人『女真訳語』から『永寧寺記碑』へ』213頁、京都大学学術出版社、2009年11月。

② 愛新覺羅 烏拉熙春 (吉本 智慧子) 『愛新覺羅 烏拉熙春 女真契丹学研究』、315頁、松香堂、2009年2月。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吉本 智慧子 (YOSHIMOTO CHIEKO)

立命館アジア太平洋大学・アジア太平洋学部・教授

研究者番号：70331105